

「学び続ける教師」実現への具体的方法論の研究 —UTS 教育研究会の設立とその具体的実践を通して—

山下 恭 南埜 猛

1. 研究の目的

中教審により、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的方策について」の答申がおこなわれた。(文部科学省, 2012) その答申の中心になるのが「学び続ける教員像」である。中教審の答申には、教員養成・採用・研修などの個別において具体的な提言をおこなっているものの、教職生活の全体を通じて学び続けられるような具体的な諸条件の整備に関しての提言はおこなわれていない。

UTS 教育研究会は、兵庫教育大学社会系同窓会「嬉野会」を母体とする教育研究会である。平成 27 年 3 月 1 日に世代間の伝承を基盤にしつつベテラン教員の教育技術を若手教員、これから教師を志す学部生・大学院生に伝え、教員の教育技術および資質の向上を目的として設立された。またこの UTS 教育研究会には、「学び続けようとする教員にはまたとない学びの機会を提供する」という側面がある。

本研究では、教職生活の全体を通じて学び続けられるような具体的な諸条件の一つとして、UTS 教育研究会を「学び続けようとする教員にふさわしい研修の場」と位置づける。その活動の検証を、①「学び」のニーズとは何か、②「学び」の環境、③学びの持続性は何に依拠するのか、④研究会への組織作りと参加の 4 つの視点から検討し、「学び続ける」核心に迫ることを目的とする。

2. 研究の方法

(1) UTS 教育研究会の性格

年間 6 回の研究会と 1 回の特別講演会を実施した(資料—1)。資料からわかるように研究会の内容は教師としての資質の向上を図るために、毎回テーマを設定しできるだけ多くの参加者を募った。関連研究対象分野は教師教育、教科教育法(歴史教育・地理教育・公民教育)、授業分析、人権教育、学級経営など多岐にわたる。教師の力量には個人差があり、なおかつ得意とする分野にも偏りがみられるのが一般的である。興味を持つ分野も様々である。こうした点を考慮し、できるだけ多くの学部生・院生・現職教員に参加してもらえようように研究会の位置づけをおこなった。

(2) 研究会の運営方法

UTS 教育研究会の運営については、現役の学部生・院生に積極的に関わってもらった。単なる参加ではなく、研究会の受付業務などを通じて参画させるよう計画した。押付けられた研究会ではなく、自分たちの研究会であるという意識を持ってもらいたかったことと、

講師の方の実践と学び続ける姿勢を学んでほしいという目的があった。学部生・院生自ら研究会の参加者の募集を行い、さらにその活動報告を「つながる社会系」HP内の嬉野会ブログに掲載するという形が徐々に出来上がった。会を重ねるたびに学部生・院生の教育研究会に対する意識が高まっていった。

研究会の講師の選定にあたっては、兵庫教育大学社会系分野の修了生を第一としたが、必要に応じて社会系OB以外の方にも特別講師をお願いした。また小中高の校種の枠を取払い、どの校種の教師にも参加しやすいように留意した。講師をお願いした方は、いずれも「学び続けている教師」として参加者にはモデルともなる方である。

研究会は神戸ハーバーランドキャンパスと嬉野台加東キャンパスの2か所で開催した。神戸ハーバーランドキャンパスでの開催については、参加しやすい環境を整えるために、加東キャンパスより、送迎バスの運行を試験的に導入し、検討をおこなうことにした。

資料—1 K.H.C=神戸ハーバーランドキャンパス H.K.C=兵教大加東キャンパス

実施日	研究会のテーマ・内容など	関連研究対象分野	会場
第1回 5月24日	院1期：東田充司 「教室での魅力的な語り方教室」	教師教育・コミュニケーション能力向上・国語教育	K.H.C 講義室5
特別講演会 7月24日	院27期：新地比呂志 「寧波外語学院での生活」	日本語教育の実践 海外事情、国際理解	H.K.C 教育言語社会棟718号教室
第2回 7月26日	講師：臼井真「歌の力を信じて— 阪神・淡路大震災から20年—」	震災関連特別講演 音楽教育、社会教育 平和教育、国際理解	K.H.C 「兵教ホール」
第3回 9月27日	院17期：陶山浩 「絵画史料の活用について」	授業研究、歴史教育 歴史科教育法	K.H.C 講義室5
第4回 12月13日	「小中高の授業分析—歴史分野授業の同時体験と研究協議」 院36期：岩下真一郎 小学校モデル授業実践 院36期：阿部一郎 中学校モデル授業実践 院29期：徳永正彦 高等学校モデル授業実践	小中高の授業比較研究・歴史教育内容論、 教材研究、授業分析 歴史科教育法 学部2年生の参加型研究会	H.K.C 共通講義棟 304号室
第5回 1月10日	院3期：山下恭 「高等学校における人権教育」	人権・公民教育・生徒指導・学級経営	K.H.C 講義室5
第6回 2月28日	院24期：小橋拓司「高等学校課題研究における地理分野の授業実践」	地理教育、探究学習、 課題研究・フィールドワーク	K.H.C 「兵教ホール」

(3) 研究会の構成

講師には資料（映像資料含む）を用意してもらい、専門の立場からの研究の成果や教育実践の内容を発表してもらった。それを受けて第二部では、参加者の質問を受ける形でフリートークの場を設定した。さらに研究会の終了後講師を交えての交流会を実施した。

(4) アンケートの実施

研究会参加者へ毎回アンケートを実施した。参加者がどのような研究分野あるいは教育実践・分野に関心があるのか、参加動機は何か、また研究会の運営方法についての改善点をさぐった。

3. 結果と考察

(1) UTS 教育研究会の個別報告（資料—1の表と重複する部分は省略する。）

①第1回 UTS 教育研究会は参加者 15 名。講師より、教師に求められる魅力的な話し方、話術の向上策について具体的にお話をいただき、さらに参加者全員が講師の指示に従って話し方の実践練習を行った。目の位置、間の取り方、立ち位置、声の調子などいろいろな角度から指導していただく実践型の講演会となった。また教育現場でよくある場面設定を行い参加者の院生にモデルになっていただき、実践に即したコミュニケーションの取り方についても重要なポイントを指摘していただいた。参加者の感想として、「話すことが苦手なので、とても参考になった。東田先生が言われたポイントを参考にして実習で授業を展開したいと思った。」(学部4年生)「最初はただ単にしゃべるだけの講義形式の研究会だと思っていたが、発声練習を行う、授業の間をどのようにすれば良いか等飽きず、ためになる研究会だった。」(修士1年)「まさか元劇団員の方が先生をしているとは思わなかった。しかも先輩にそのような方がいらっしゃるということで、すごく興味があり参加できてよかった。もっと魅力ある話し方を学んでいきたいと感じた。」(修士2年)などがあがった。

②UTS 教育研究会特別講演会の参加者 10 名。講師の赴任先寧波での生活も含めて外語学院日本語学科の学生諸君とのコミュニケーションの様子、授業風景、さらに学生の日本語でのスピーチコンテストなど多くの事を映像資料も含めて紹介いただいた。参加者より、「中国の大学生生活に触れ、学生の方のアグレッシブさがものすごく伝わってきた。新しい視点で物事を見ることができました。人と人との関わりの重要さがわかりました。」(大学院修了生)「新地先生の寧波での生活ぶりを知りたかった。本当の中国を紹介していただいた。」(中国留学生博士3年)などの感想があがった。

③第2回 UTS 教育研究会の参加者 23 名。講師より「しあわせ はこべるように」を作詞作曲した時の熱い思いを語っていただいた。また授業風景などを映像で見せていただき、詳しく解説をいただいた。出席した学生には、当日の教員採用試験後に駆けつけたものもあり、関心の高さを窺わせた。講演後の交流会には多くの学部生・院生も残り、講師の学び続ける姿勢が伝えられた。学部生・院生・一般教員・大学教員などが一堂に集い、学ぶスタイルができあがった。

④第3回 UTS 教育研究会の参加者 16 名。講師より歴史教育の資料の取扱いと絵画資料の活用について中心にお話をいただいた。まず、絵画資料についてその形態・態様・学習過程・

性格・作成者・資料の加工度などの視点から類型化ができると示され、さらに絵画を読み解く方法についても指摘された。また具体的な作品をあげて授業で使用する時の提示方法についても提言をいただいた。さらに最近になって通説が覆されている絵画資料（肖像画など）について紹介していただき、背景にある歴史学の問題点を明らかにされた。院生からは学芸員になりたいがどうすればなれるかなど多くの質問が出た。

⑤第4回 UTS 教育研究会の参加者 65 名。研究会はまず、小・中・高等学校の現職教師による模擬授業が行われた。具体的には、小学校・中学校・高等学校の歴史分野の授業を共通テーマ「自由民権運動」で実施し、児童・生徒役の兵庫教育大学学部 2 年生に体験してもらった。その後研究協議がおこなわれ、授業者と学部生・院生らとの間で質疑応答がおこなわれた。参加者は授業を肌で実感し比較体験することができた。その後の交流会では多くの学部生・院生も参加し現職教員の教育現場での話に耳を傾けた。

⑥第5回 UTS 教育研究会は参加者 9 名。講師からつぎの二つの事例が報告された。まず配慮を要する生徒の指導事例について報告があった。クラスになじめず不登校になり、問題行動を繰り返す女子生徒。複雑なクラスでの友人関係・親子関係が明らかになっていく。専門医の助言を受けて、新しい環境づくりが始まり、そして生徒が徐々に立ち直っていく姿が報告された。つぎに「外国籍生徒の進路問題」というテーマで報告がおこなわれた。経済的に恵まれず生活保護の家庭で育った A さんは保育士の夢を実現すべく努力を重ねる。しかし短大の入学金問題、就職差別問題など多くの困難が待ち受けていた。こうした問題にも負けず人生を切り開こうとする A さんの姿が報告された。質疑応答を受けては、第二部では生徒への指導のあり方について議論がおこなわれた。

⑦第6回 UTS 教育研究会の参加者 27 名。講師の勤務校加古川東高校での地理授業の実践報告がおこなわれた。「AED の空間配置」や「加古川市のゴミ処理問題」についての実地調査に生徒が中心的な役割を果たし、さらに兵庫地理学協会での発表と調査報告書の執筆を生徒自身がおこなうという授業実践に参加者の興味はつきなかつた。学部生・院生と現職教員が集う研究会の本来のスタイルが実現した。

（2）アンケート調査結果より

1. アンケート回収状況

アンケートの提出は出席者の意思を尊重しており、そのため回収数は研究会の参加者総数 165 名よりも少ない。アンケートの回収総数は 111 枚、内訳は学部 54 枚、院生 30 枚、一般（現職教員など）27 枚であった。

2. 主な調査項目と集計結果

ア. UTS 教育研究会への参加動機（資料-2）

参加動機については、「指導教官に勧められて」が学部生・院生に最も多い。第4回の研究会が集中講義の一環として実施されたという事情にもよる。「研究テーマにひかれて」という参加動機は重要である。魅力的な研究会にするための一つの要素としては、研究テーマが重要なポイントになることが分かった。「研究会の設立趣旨に賛同」の回答者は継続的に参加されている。運営委員になって（仕方なく）という参加者もいるが、少なかった。

資料一2 研究会参加の動機（複数回答可）

	1回	2回	3回	4回	5回	6回	合計
指導教官から勧められて	5	2	1	29	0	7	44
UTS 教育研究会設立趣旨に賛同	3	2	2	2	1	2	12
研究テーマにひかれて	8	6	3	16	4	9	46
UTS 教育研究会の運営委員として	3	2	4	0	2	0	11
知人からの勧めがあつて	0	1	1	0	0	0	2
その他（講師にひかれてなど）	0	2	0	1	0	3	6
合計	19	15	11	48	7	21	121

イ. 関心のある教育分野（複数回答可、資料一3 参照）

研究会で取り上げてもらいたい教育分野は何かという問いについては、すべての回で教科指導分野に関心を持つ学生・一般修了生（現職教員）が最も多かった。学級経営、生徒（生活）指導の順となり、さらに人権教育、部活指導、進路指導と続く。研究会の参加者が社会系教育分野に所属する学部生・院生やその卒業生・修了生が多く、教科指導に関心が深いのは当然の結果かもしれない。一方で第4回のアンケート結果に注目したい。アンケートの中心は学部生（2年生中心）・院生のものがほとんどであるが、教科指導と学級経営に関心が高いことがわかった。今後 UTS 教育研究会のテーマを設定するときの参考にしたい。

資料一3 研究会で取り上げてもらいたい教育分野（ ）の数は一般教員分・大学院修了生

	1回	2回	3回	4回	5回	6回	合計
学級経営	0	3 (2)	3	24	1	3 (3)	34 (5)
教科指導	7 (1)	7 (6)	7 (1)	35	2	14 (10)	72 (18)
生徒指導	3	3 (3)	2	10	1	1 (1)	20 (4)
部活指導	2	2 (2)	0	3	1	2 (1)	10 (3)
進路指導	1	2 (2)	0	3	0	3	9
人権教育	1	3 (2)	0	4	2	3	13
合計	14 (1)	20 (17)	12 (1)	79	7	26 (19)	158 (38)

ウ. 社会系教育分野で関心のある学問分野（資料一4）

アカデミックな分野で最も関心の高い分野（あるいは学びたい分野）を問うと日本史分野の関心度が際立った。（歴史分野の関心を詳細に知るため、高等学校での分類を参考にし、日本史分野と世界史分野に分けた。）続いて教育法（社会科教育法、歴史科教育法、地理教育法、公民科教育法含む。）分野が続いた。世界史、地理、公民分野は同数だった。教育学（教育社会学、教育史、カリキュラム論など）の関心度は他の分野に比較して低かった。第4回のアンケート結果は兵教大の学部生の意向を反映しているが、日本史分野と世界史分野とで差ができています。背景には、高等学校で日本史 B を学んだ学部生が多かったことやセンター試験で日本史 B を選択した者が多かったからだろうと思われる。日本史分

野への関心の高さはそれまで学んだ知識と興味関心を引き継いでいる。

資料—4 研究会で学びたい学問分野 (複数回答可) () は一般教員分 (院 OB)

	1回	2回	3回	4回	5回	6回	合計
日本史分野	3	2	4 (1)	31	2	10 (6)	52 (7)
世界史分野	2	3 (1)	3 (1)	20	2	4 (2)	34 (4)
地理分野	4	1	6 (1)	15	1	7 (5)	34 (6)
公民分野	2	4 (1)	4	17	2	5 (3)	34 (4)
教育法分野	6	4 (3)	3	26	3	7 (5)	49 (8)
教育学分野	2	1 (1)	1	11	1	4 (4)	20 (5)
合計	19	15 (6)	21 (3)	120	11	37 (25)	223 (34)

5. まとめ

本研究では UTS 教育研究会を実験の場として設定し、教職生活の全体を通じて学び続けられるような具体的な諸条件について検討した。その検討にあたって、4つの視点を設定し、それぞれにその条件や課題を明らかにした。その結果は以下の通りにまとめられる。

①「学び」のニーズの観点より

アンケートの結果から、学部生・院生は教科指導と学級経営に強い関心を示していることがわかった。その背景には将来教育現場に立った時にまず求められる日々の授業実践力をつけたいという願いと学級担任能力を高めたいという願いが感じられる。今後研究会としては、こうしたニーズを意識しながら研究テーマを設定する必要がある。

②「学び」の環境の観点より

ア. 開催場所

開催場所は参加者にとって重要な学びの環境である。会場の神戸ハーバーランドキャンパスと嬉野台加東キャンパスとでは明らかな相違点があった。神戸ハーバーランドキャンパスは交通の便が良く、兵庫県下各地より、兵教大の卒業生・修了生ならびに現職の教員が参加しやすい。一方加東キャンパスでの研究会には学部生・院生の参加者が圧倒的に多かった。神戸ハーバーランドキャンパスは本学のある加東キャンパスから遠く、学部生や院生の参加にはかなりのハンデがあるといわざるを得ない。この問題を解消すべく加東キャンパスよりハーバーランドキャンパスまでバスを運行し参加者の便宜を図ったが、予想に反して多くの参加者を集めることはできなかった。今後さらなる検討が必要である。また逆に卒業生や修了生、現職の教員にとって加東キャンパスに出向くという点は交通費の負担もあり難しいと指摘せざるを得ない。2つの開催場所にはメリットとデメリットがそれぞれあり、今後両会場共に参加者を増やすにはどのような方法があるのか考えたい。

イ. 開催日時

開催日時についても考えなくてはならない問題である。すでに教職についている卒業生や修了生にとって、平日の研究会への参加は不可能である。土・日が考えられるが部活動を担当されている場合も多い。結局のところ会場までの交通移動時間も考えると日曜日の午後ということになる。また学校行事の観点から学期末や定期考査、入試の多忙期は避け

たいという事情もある。学部生・院生にとっては、逆に土・日にはバイトが入ったり、研究のための時間として残したいという思惑もある。夏休みなどの長期休業中の開催は、現職教員には余裕はあるものの、学部生・院生にとっては実家に帰るなどの時期と重なる。このような事情があったにしても参加したいと思わせるような研究会が求められる。

ウ．広報

広報は事前に研究会の日程や研究テーマを知らせる意味で重要である。参加するか否かの判断は、広報による情報に左右される。都合のつく日程か、興味のあるテーマか、会場へのアクセスなどは参加動機を左右する。「Hyokyo-net」への掲載や加東キャンパス、神戸ハーバーランドキャンパスでの掲示などで広報活動を行ってきたが、学部生・院生の参加については担当指導教員より参加を勧めていただくことが今回のアンケート結果より、大きな参加動機につながるということが明らかになった。兵教大の教員のご支援をさらにいただきたい。

③「学びの持続性は何に依拠するのか」の観点より

研究会の印象は非常に重要である。一度研究会に参加して、つまらないと感じたら次回からの参加は望めない。研究会に継続して参加している院生からは、「とても役立っている。」あるいは、「いろいろなテーマが設定されており勉強できる。」などのコメントが寄せられている。また今春から教育現場に立つ予定の学部4年生からは、「今後は継続的に研究会に参加したい。」というメッセージが届いた。40歳前後の現職教員からは、「研究会への出席が、非常に刺激になっている。」という意見をいただいた。院生は研究者の立場からの興味関心、学部4年生は就職後の不安からの支援要請、現職教員はこれまでの教師生活を振り返るといった視点が感じられる。このような世代別のあるいは立場に応じての研究会への期待はさまざまであるが、期待に応えられるような研究会の質が問われている点は変わらない。研究会の質は、参加者に提供する専門的知識と教育現場で役に立つ教育技術の伝播に集約される。畢竟研究テーマの設定と講師の選定は重要な課題となる。研究会には、こうした諸事情を勘案しながら質の維持を図っていく必要がある。

④「研究会の組織作りと参加」の観点より

研究会の組織作りに際して心掛けたことがある。それは研究会を運営する側と、研究会の参加者との距離感を縮めるということである。参加者が自分たちの研究会であるという意識が高まれば研究会の活性化につながる。こうした観点から UTS 教育研究会は、兵庫教育大学社会系講座の教員との協力のもと、学部生・院生の方に積極的に運営に参画してもらうことにした。研究会の広報や当日の受付業務とともにブログの立ち上げと活動状況の紹介などで大きな役割を担ってもらった。今後は学部生・院生の要望を取り入れ運営方法を改善していくとともに研究会でのテーマ設定に協力を願いたい。

本研究は、単に諸条件の検討や課題を明らかにすることが目的ではない。教職生活の全体を通じて学び続けられるような具体的な諸条件を整備し、学び続ける教員を実現することが、本研究の究極的なねらいである。したがって、今年度の研究成果をもとに、UTS 教育研究会の内容や実施方法を見直してより良い形を追求する取り組みをおこなうとともに、

その計画を検証しつづけることが大切である。すなわち PDCA (Plan (計画) → Do (実行) → Check (評価) → Act (改善)) サイクルの形で、研究会事業の実施と研究を継続していくことが求められる。バス運行の検証実験の実施、多様な講師や講習内容を実験として実施するに必要な予算をどのように確保するかも残された課題といえる。

未筆ながら、UTS 教育研究会の目標とした学部生・院生・一般教員・大学教員が一堂に集い議論し高め合うという研究会のスタイルができあがったことは一つの成果である。参加者の研究会への満足度はアンケートより判断すれば高いように思われる。7 回すべて参加した院生も出てきている。今後は学部や大学院を今春巣立った卒業生や修了生が引き続き研究会に参加してくれるかどうか大きな関心事である。それこそが研究会の求める「学び続ける教員像」のスタート地点に着くことにつながっていくからである。

付記

本研究にあたり、UTS 教育研究会の参加者の皆様にはアンケート調査に協力いただいた。また臼井真先生には外部講師として参加いただきました。さらに兵庫教育大学都道府県連携推進本部・同窓会事務局には「Hyokyo-net」へ研究会案内の掲載等でお世話になりました。記してお礼申し上げます。また本研究では、兵庫教育大学大学院同窓会「大学院同窓会会員と大学教員との共同研究」(平成 27 年度)の一部を使用した。

参考 URL

文部科学省 (2012) : 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申) .

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm. 2016 年 3 月 25 日最終アクセス。